

日本の伝統文化 畳とは？

年 組 番 名前：

ワーク 1

- 畳とは、おもにイグサ（蘭草）を使用した床材料のこと。
- 畳表・畳床・畳縁からできている。

畳表（たたみおもて）

畳床の表面を覆う**ござ**（敷物）の部分。綿や麻の糸をたて糸にして、イグサの茎を織り込んで作る。最近では樹脂や和紙などを使った畳表もある。

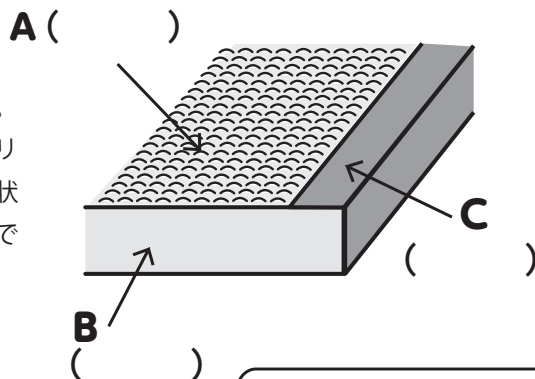
畳床（たたみどこ）

畳の芯にあたる部分で、厚さは一般的に 5～6cm 程度。もともとは稲わらを重ねて作っていたが、最近ではポリスチレンフォーム（発泡スチロール）や、木材を繊維状にしてから板状に成形したものなど、さまざまな材料で作られている。

畳縁（たたみべり）

畳の長辺につけられた布のこと。畳の補強や見た目の美しさ（装飾）などのためにつけられる。昔は綿や麻などが使われていたが、最近では化学繊維のものが主流となり、さまざまな色や柄のものが作られている。

() に畳表、畳床、畳縁のいずれかを書き込んでみよう。



古代や中世は、畳床の厚さや畳縁の色・模様などが、使う人の身分により異なっていたけれど、今はさまざまな種類から自由を選べるよ。

ワーク 2

★畳豆知識

- 畳は、フローリングと比べて、吸湿性、保温性、弾力性などが高い。また、音や振動を吸収する働きもある。これは、イグサの繊維と繊維の間にたくさんの空気を含むことができるためである。
- イグサのおもな産地は熊本県。イグサには独特な香りがあり、リラックス効果があると言われている。
- 畳表が変色したり、傷んだりした場合は、畳表を裏返して張り直したり（裏返し）、畳表を張り替えたり（表替え）して使用することができる。
- 日本の伝統的な住まいでは、畳の大きさが建築寸法の基準（モジュール）となっている。このため、現在でも畳の枚数で部屋の大きさが示されることが多い（6 畳、4 畳半など）。
- 畳の大きさにはいくつかの種類があり、おもに関西で使われている京間（191×95.5cm）、関東などで使われている江戸間（176×88cm）、名古屋などで使われている中京間（182×91cm）、集合住宅などで用いられている団地間（約 170×85cm）などがある。いずれも長辺：短辺が 2：1 になっている。

考えてみよう①：畳の部屋のよいところを考えてみよう。

考えてみよう②：畳の文化は日本独特のものである。日本の伝統文化として受け継いでいくためのアイデアを考えてみよう。

製作実習の記録

年 組 番 名前：

①題材名

②おもな材料，道具

③製作のねらい

④製作の手順

⑤完成図のイラストを描き，特に丈夫に縫う必要があるところと，その理由を書き入れよう。



⑥製作のふり返し・感想

3行以上は必ず書いてニャ。

